

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④

大悲を行じて生きる

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第106回と第107回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、106回では「智慧、大海のごとし」等について、107回では「方便の力」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第104回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■浄土は大慈悲から生ずる

天親菩薩の『浄土論』の中に浄土の性^{しやう}功德というものがあって、「正道大慈悲 出世善根生^{ぜんこんしやう}」（『真宗聖典』135頁、東本願寺出版、以下『聖典』）と。つまり、浄土の性は大慈悲であって、浄土は大慈悲によって生み出されているのだと。その言葉を曇鸞大師が注釈して、大悲ということは、小悲や中悲ではないのだと言っています。大悲は、如来の慈悲であって、これは無条件の慈悲です。衆生の分限で起こす慈悲は条件付きの慈悲です。ですから、本願の大悲は徹底的にそうした凡夫の有限性を批判して、大悲の場所を開こうと、呼びかけてくる。これはなかなか凡夫にとっては信じがたいし、受け入れがたい。

親鸞聖人は、「一如宝海よりかたちをあらわして」（『聖典』543頁）と言っておられますが、この大悲が起こるのは、如が動くという発想なのです。真如平等や、法性平等など言うのですけれども、法の本来性、存在の本来の在り方は、平等であると。しかし、現実には我々はあらゆるものが違う。自我があって、他とはどうしても一緒にな

れない、そのような問題を抱えて生きている。それに対して如来は、本当は平等であり、大悲が呼びかけている世界に触れなければならないのだと言うのです。そうでなければたすからないのだと、こう呼びかけてくださる。宗教的要求というのは、こうした大悲が呼びかける世界が欲しいということです。

■大悲を行ずるとは大悲を信ずること

大慈悲ということは、如来が大慈悲であって、凡夫から大慈悲を起こすことはできないのです。凡夫は有限の限定された身を生きているのですから、これがそのまま無限には絶対にならない。それで、大慈悲が課題になっていても、我々は自力で大慈悲に立てるわけではない。でも、無限からは、有限を外して無限があるのではない。有限はすべて無限の中にある。だから「大悲を行ずる」（『聖典』247頁）ということが『教行信証』の「信巻」にあるのですけれども、大悲を行ずるということは、凡夫が行ずるわけではない。大悲が凡夫を通して大悲を行じようとする。

それは、本願が行として「南無阿弥陀仏」を行ずる。つまり、「南無阿弥陀仏」を行ずる主体は本願なのです。凡夫が行ずると考えると、これは小さな行になって大行ではなくなる。我々が行ずるとすると、念仏では物足りないとか、念仏なんかたいしたことないとか、そのような発想になって、それで難行苦行してあたかも自分が無限にまで行けると発想するけれども、有限でしかない人間が無限には行けないのです。そのような問題を突き詰めて、大悲を行ずるということは、大悲が

親鸞仏教センターの動き

(2017年11月～2018年1月) 一抄出

行じてくる。大悲の本願が呼びかけてくださる行を、我々はいただいて生きる。そのように発想して、現生の利益として「常行大悲の益」(『聖典』241頁)、常に大悲を行ずる利益ということをお親鸞聖人はおっしゃるのです。

それは、大慈悲を信ずるということです。信ずるということが、自分に大悲が行じてくるということです。そして、自分がその大悲を行じて生きるということがあると、それが大悲に触れたいと思う人々に^{おの}自ずから伝わっていくのです。

■願海平等なるがゆえに発心等し

有限な凡夫が意志をもって大悲を伝えとか、そのようなことはできないわけです。できないものをできるように思うのは間違いなのです。凡夫であるという身において大悲をいただく。大悲の中にあると信ずる。そうすると、そのことが有限に苦しんでいる人々に、「ああ、大悲が自分のうえにはたらいてくださっているのだ」という考え方を学ぼうとする動きが起こるわけです。起こってくることに於いて大悲が行ずる。このように言うことができるのだらうと思うのです。

つまり、大悲というものがあって、という発想ではないのです。大悲は、はたらきとなって我々にくるわけです。大悲がどこかにあるのではない。我々のこの存在構造の中に、有限であることを包んで大悲がある。大悲はそのようにして、あたかも場所、浄土の場所のごとくにして我々にはたらいてくる。こういうことが、衆生において大慈悲心を得るという意味になるのだらうと思うのです。

我々自身の心の本質が大慈悲心になるわけではない。我々はどうしても有限性をもっている。小さな心しかない。分別する心、計算する心、汚い心しかないわけです。だけど、実はそこにはたらきかけている大きな心がある。如来の本願が立ち上がって我々を救わずにおかんと呼びかけてくださる。それを親鸞聖人は「願海平等なるがゆえに発心等し」(『聖典』242頁)とおっしゃるわけです。

(文責：親鸞仏教センター)

■2017年

- 11/7 第106回(通算第157回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/7 第206回英訳『教行信証』研究会
- 11/10 ご命日のつどい
- 11/14 第6回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 11/20 第19回「『教行信証』と善導」研究会
- 11/28 第182回清沢満之研究会
- 11/30 第13回研究員と読む公開講座「親鸞の浄土観—『教行信証』の仏身仏土の巻を読む—」担当：青柳研究員①11/30 ②12/7 ③12/14 ④12/21
- 12/2 第16回東アジア仏教研究会(駒澤大学大学会館)：戸次研究員がコメンテーターとして出講
- 12/4 第207回英訳『教行信証』研究会
- 12/4 第107回(通算第158回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/8 ご命日のつどい
- 12/8 近現代『教行信証』研究検証プロジェクト「『教行信証』研究をめぐる諸課題」大谷大学教授：三木彰円氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/8 平成29年度西山学会研究発表大会(誓願寺)：中村囁託研究員発表「證空の末法思想—『自筆鈔』／『他筆鈔』の相違に着目して」
- 12/13 第58回現代と親鸞の研究会「心の哲学と幸福論」慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科委員長、同研究科教授：前野隆司氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/18 第20回「『教行信証』と善導」研究会
- 12/19 第7回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 12/22 親鸞仏教センター報恩講
- 12/25 第183回清沢満之研究会

■2018年

- 1/9 第208回英訳『教行信証』研究会
- 1/9 第108回(通算第159回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/11 第13回研究員と読む公開講座「清沢満之と浄土をめぐる問い」担当：長谷川研究員①1/11 ②1/18 ③1/25 ④2/1
- 1/12 ご命日のつどい
- 1/24 第21回「『教行信証』と善導」研究会
- 1/26 第8回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 1/30 第184回清沢満之研究会